

【研究ノート】

認識論の レビューに関する一考察（4：唯識論）

——人材開発手法の理解に役立てるために——

加 藤 雄 士

要 旨

これまで人材開発手法の本質的な理解に役立てるために3本の先行研究で、認識論を学際的にレビューしてきた。しかし、未だ説明できていない事象が4つあると指摘する。そのうえで、それら4つの疑問点に対する回答を唯識論の知見に求めて考察する。そして、これらの知見を薄井とグリーンダーの統合モデルに書き加えることにより認識論のモデル図をバージョンアップする。人材開発だけでなく、組織開発にも参考となるモデル図を提示する。

I は じ め に

筆者は、人材開発手法の理解に役立てることを目的として、学際的に認識論のレビューをしてきた。これらの研究により認識のプロセスについて一定の理解が得られるようになったものの、未だ理論的に説明できていない点が残っている。本稿では、その4点を明示し、その回答を唯識論の説明に求めて考察する。また、唯識論の知見を既述の薄井担子とジョン・グリーンダーの知見を統合したモデルに書き加えることにより、認識モデルの図のバージョンアップを試みた。

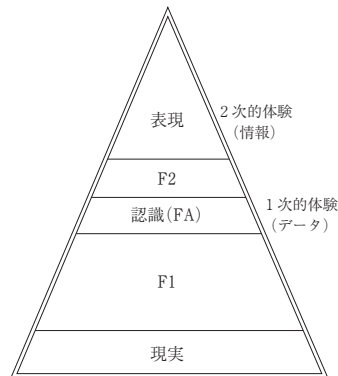
II 認識論のレビューに関する先行研究と残された問題意識

筆者は、3本の先行研究で、学際的に認識論のレビューを行い、各理論の比較考察を行った¹⁾。その目的は、人材開発手法の本質的な理解に役立てることにあった。また、これらの成果をベースにして、3つの人材開発手法の体系化を試みた²⁾が、未だ説明できていない以下の4つの事象がある。

1 「現実」以外からスタートする認識プロセスの説明不足

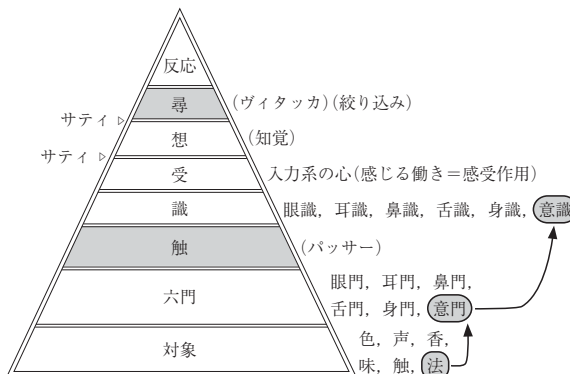
筆者の先行研究では、一般意味論、認知心理学、大脳生理学、看護学、仏教理論、NLP（神経言語プログラミング）などの理論をもとに図示して比較考察した。例えば、看護学の薄井とNLPのグリーンダーのモデルを統合した図表1（以下、「薄井とグリーンダーの統合モデル」という）を作成して認識のプロセスを以下のように説明した（加藤，2018）。「現実」を感覚器官で感知した後、神経学的変換（F1）を経て知覚経験（認識，FA）し、その後で言語的変換（F2）を行う³⁾。この説明では、認識プロセスの出発点を五感で感知できる「現実」においている。しかし、「現実」（五感）を感覚器官で感知することだけからそのプロセスがスタートするわけではない。頭の中の思考やイメージから認識がスタートすることもある。

図表1 薄井とグリーンダーの統合モデル



以下の地橋のモデル図（加藤，2016a）では認識の出発点を「現実」だけでなく、それ以外の対象（法→意門→意識というプロセス⁴⁾，図中の矢印に注目）も示唆されている。しかし、この点について、これまでのレビューでは十分に考察できていない。

図表2 地橋のモデル（一部加筆）



2 F1（神経学的変換）のプロセスに関する説明不足

図表1では、「現実」を感覚器官で感知する際に、最初にF1（神経学的変換）が介在すると説明した。その変換がどのように行われるのか、そのプロセスに何が影響を与えるのかについては、大脳生理学や認知心理学の知見（「スキーマ」などの概念）を使って説明してきた⁵⁾ものの、理論的な説明はまだ十分ではない。

3 潜在意識の認識プロセスに対する影響に関する説明不足

認識のプロセスに潜在意識の領域が大きな影響を与えていることは想像に難くないが、どのような影響を潜在意識が与えているかという点については理論的な説明が十分でない。

4 個人の認識がコミュニケーションに与える影響に関する説明不足

これまでのレビューでは個人の認識プロセスについてフォーカスをあててきたが、人の認識プロセスが2人以上のコミュニケーション（や人間関係）に与える影響については説明できていない。

本稿では、上記の4点の説明に役立つ部分を唯識論からレビューし、他の理論（主に薄井とグリンダーの統合モデル）と統合することを試みる。「唯識11年」⁶⁾と言われるほど難解な唯識論を浅学の身に論じることは無謀な試みであるが、人材開発手法の理解に役立てるために多川（2013）を中心にレビューする（以降、引用の下線は全て筆者）。

III 唯識論のレビュー

1 唯識論における「現実」とは（唯識所変）

（1）唯識所変

私たちが認識しているものは、「現実」をそのまま写しとったものではなく、私たちの心の上に映し出された影^{ようぞう}像にすぎないと唯識論では説明する。

私たちの認識というもの、つまり、ものごとの〈私にとっての〉意味を知り分けようとするものの実際は、いついかなる場合も下界のまる写しというのではなく、その心のありように即して下界が認められるものであるということになります。つまり、私たちの心こそが、ものごとをつくり上げ、かつ、その内容を決定しているのだといわなければなりません。これが、唯識あるいは唯識所変ということであります。そして、そのことを裏返すならば、私たちというのは、わが心のはたらきによって知られ

た限りの世界に住んでいるものであるということになります。(多川, 2013, p.10)

私たちは、直接に外界を見・聞きして知覚しているように考えているのですが、実はそうではなく、自分の心識によって変えられ、自分の心の上に映し出された外界の事物の影像を認識しているにすぎない、と唯識仏教は説きます。もし、そうであるならば、私たちの見・聞きする世界というものは、世界そのものであるはずがありません。私をとりまくあらゆるものは、私の識所変のものだ—。唯識仏教では、自己と環境との関係を、このように理解するのです。(多川, 2013, p.12)

自分の心によって変えられ、そして、自分の心の上に映し出された〈そのものに似た影像〉を認識の対象としているのだ、と考えたのです。(多川, 2013, p.23)

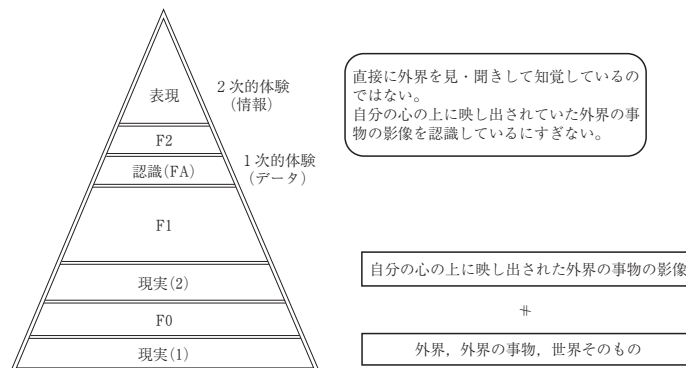
そのものに似た影像を变幻して心上に浮べるのですから、そこに、その人なりのものが現れるのは当然なのですが、なお、それが、どこまでそのものの真正のスガタを反映しているものなのか、ということについては、実のところ、はなはだあやしむべきものなのです。(多川, 2013, pp.23-24)

図表1で「現実」としてきたものも、実は2つに分けて（主に波線と実線の下線を対比して）とらえる必要がありそうだ。

(2) 薄井, グリンダーの統合モデルと唯識所変

ここまでの知見を前掲の薄井とグリンダーの統合モデル（図表1）にあてはめて整理すると、以下のように変形して図示できる（図表3）。これまで「現実」と言ってきたもの

図表3 薄井, グリンダーの統合モデルと唯識所変



を「現実（1）」と「現実（2）」に分けて、その間にもう1つの変換（その変換を「F0」と名付けた）が行われていると考えるべきである。なお、「現実（1）」は、「世界そのもの」（引用文中、破線の下線部分）、「現実（2）」は、「自分の心の上に映し出された〈そのものに似た影像〉」（引用文中、主に実線の下線部分）のことをいう。

2 心が心を見ている（四分説）

（1）認識作用（四分説）

私たちは、心の外に厳然として在るものを直接に知覚し認識していると思っているが、それは心の中に生じたそのものに似た影像にすぎないと唯識論では説明する。したがって、「心が心を見ているにすぎない」と説明する（以下、下線は重要な箇所。筆者が引いた）。

自分たちの都合のいいように、生活する上で接しなければならないものすべてを変形して認識している—それが、私たちの現実のすがただと、唯識は考えています。このように、私たちのころは、認識の対象をすべて変現しますので、唯識仏教では、単に〈心〉といわないで、〈能変の心〉といいます。そして、それに対して、認識対象（これを境といいます）は、能変の心によって変幻されたものですので、〈所変の境〉^{きょう}というのです。こうした能変の心・所変の境ということについてまとめて述べているのが、四分・三類境^{しぶんさんるいきょう}という教説です。四分説は、〈能変の心〉の作用を明らかにし、三類境説は〈所変の境〉の性質を明らかにするものです。（多川，2013，p.14）

唯識論では、この「四分説」という概念について次のように説明している。

このなか、〈能変の心〉の作用を明らかにする四分説とは、私たちの認識作用は、その内容からみて便宜上四つに分けることができるという考え方です。それらは、①相分^{そうぶん}②見分^{けんぶん}③自証分^{じしょうぶん}（自体分）④証自証分^{しょうじしょうぶん}、の四つです。（多川，2013，p.14）

みられるもの（相分）とみるもの（見分）、そして、そのみることを確認するもの（自証分）とその確認をさらに認知するもの（証自証分）とに分かれるのである、と説くのです。私たちが、ふつう、心の外に厳然として在るものを直接に知覚し認識していると思っている場合も、実は、それは自分の心のなかに変現した相分、つまり、心上に生じたそのものに似た影像^{ようざう}にすぎないもので、それを、私たちは認識の対象としているというわけです。

もし、そうであれば、心が心を見ているだけではないか、ということになります。

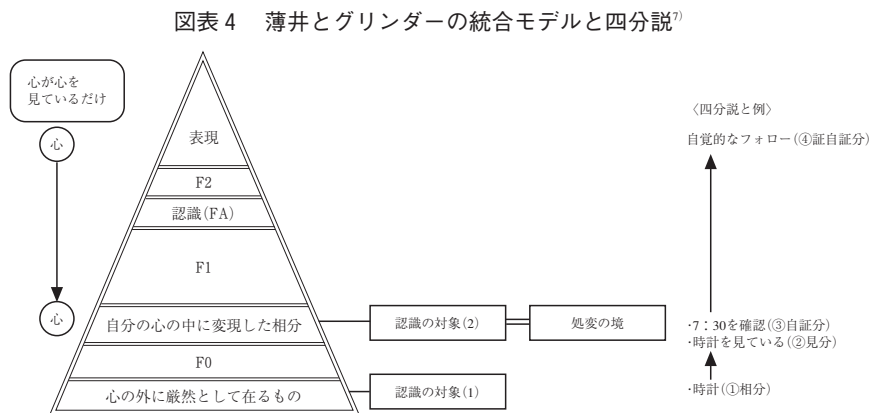
(多川, 2013, p.15)

この四分説を具体例で表すと以下になるという。

なお、ここでは、〈私が、今、時計を見ている。そして、時刻は午後七時三十分である〉という場面にあてはめて、四分を考えてみましょう。その場合、まず時計が相分で、それを見ているのが見分です。さらに、見ている時計が午後七時三十分を指していることを確認するのが自証分、そして、そのように確認するのは、ふつう、自覚的なものですので、そうした自覚的なフォローが証自証分であると考えればいいのではないかと思います。(多川, 2013, p.17)

(2) 薄井, グリンダーの統合モデルと四分説

ここまでの知見を、薄井, グリンダーの統合モデルにあてはめて、四分説の概念を図示しようと試みたのが図表4である。認識の対象を2種類に分けて(認識の対象(1)と認識の対象(2)とし)、前者を「相分」、後者を「所変の境」(あるいは、見分、自証分)とした。



この図で、「心が心を見ているだけ」ということが、直感的に理解しやすくなるものと考ええる。

3 3つの「認識の対象」(三類境)

(1) 三類境

唯識論では「認識の対象」について「三類境」という概念を用いて説明している。

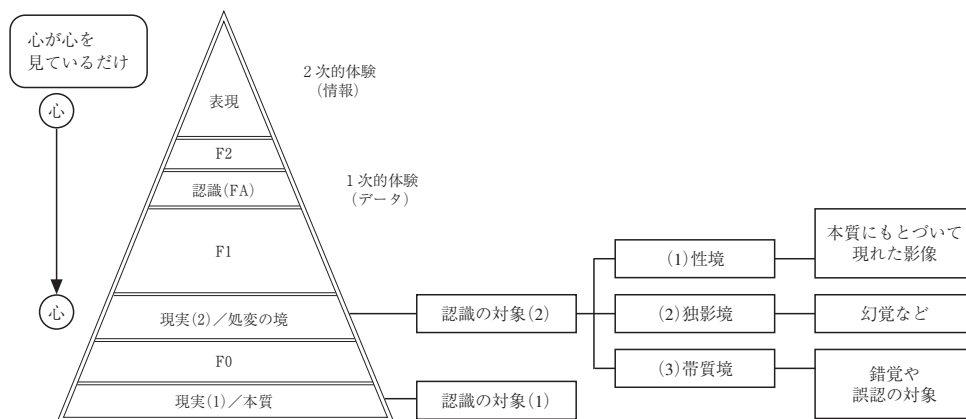
〈所変の境〉の性質を明らかにする三類境とは、^{しょうきょう どりゅうきょう たいげつきょう}①性境②独影境③帶質境の三つです。（多川，2013，pp.17-18）

性境は、本質にもとづいて変現された影像で、正しい認識の対象です。それに対して、独影境は、本質とはかかわりなく、心がおのずからもっている作意の力によって心上に映し出された影像で、まったく根拠のない認識対象です。幻覚などが、この好例です。また、帶質境とは、本質に根拠をおきながら、なお、正しく認識しえなかった場合の対象のことで、いわゆる錯覚や誤認の対象のことです。（多川，2013，p.18）

（2）薄井，グリンダーの統合モデルと三類境

薄井，グリンダーの統合モデルに三類境の概念を付け加えると以下のように図示できる。

図表5 薄井とグリンダーの統合モデルと三類境



心が心を見ているというだけでなく、認識の対象（2）には、幻覚や、錯覚、誤認の対象も含まれていることが明示された。人は正しく認識しているつもりであっても、錯覚や誤認、幻覚なども含んで認識している場合もあり、正しく（本質をそのままに）認識することは不可能だと理解できる。

4 五識による認識（コトバを介在させない認識）

（1）前五識とその特色

唯識論では、五感に相当する五識について、コトバというものを介さない認識であると説明する。

眼識，耳識，鼻識，舌識，身識，の五識は，それぞれ色境，声境，香境，味境，触境の五つの境（対象）に対してはたらくもので，いわゆる視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚に該当します。総じて，感覚のことです。（多川，2013，p.25）

たとえば，紅色の花を前にして眼識が生起するというのは，眼識の相分であるそのような色境について，紅色をおびた一定の形状をただそのままに直感的に認めるだけです。そこには，そのものを意味づけるコトバというものがありません。コトバというものを介さない認識，すなわち，直観です。

この段階では，〈これは紅色の花であり，この花はハスである〉というような理解はありません。しかし，このときの認識の対象は，前に述べた〈三類鏡〉でいうならば性境です。つまり，そのものの真正なスガタがとらえられていると考えられています。（多川，2013，p.26）

5 第六意識による認識（コトバを介在させる認識）

（1）第六意識の特色

六番目の「意識」でコトバが介在してくると唯識論は説明する。

〈これは紅色の花であり，この花はハスであり，そして，とてもいい香りがする〉というような認識は，次の段階，すなわち，〈意識〉の作用によってなされるものであります。眼識から数えて六番目の〈意識〉とは，知覚・感情・思考・意思などの心のはたらきで，常識的にいうところの心と考えてまちがいありません。（多川，2013，pp.26-28）

前五識と第六意識との違いについては次のように説明する。

前五識が起こると同時に生起するのが，第六意識です。そのものをありのままに純粹に認識したものを，〈これは紅色のハスの花であり，たとえようもなくいい香りだ〉，と明瞭に認識する一。それが，意識の作用です。また，前五識では，ただ現在の対象がありのままに直観されるのみでしたが，第六意識は，現在はもちろん，過去に遡ったり未来に継続して作用します。

前五識による現在の境のありのままの認識は，感覚器官を通してなされるものだから，その感覚器官，たとえば眼を閉じてしまえば，眼識による認識はその時点で終わってしまいます。前五識による認識は，このように，その場かぎりのものなのです。

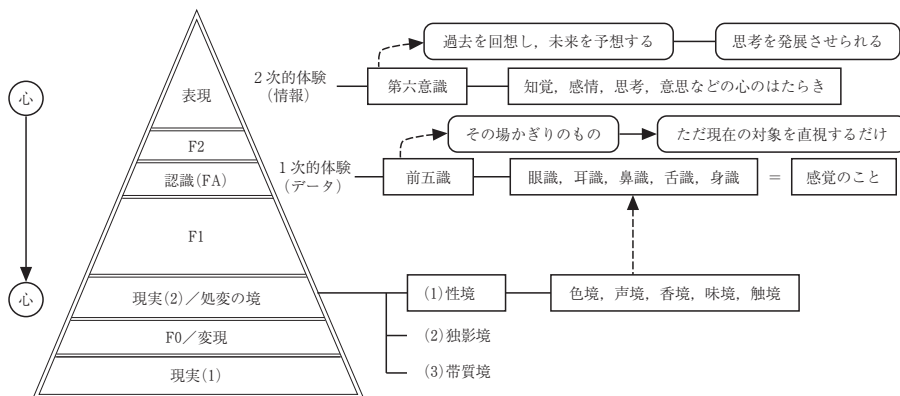
しかし、意識では、それまで見ていたハスの花について、心のはたらきを継続することができます。継続性があるからこそ、後からそのハスの花についてさまざまに考えをめぐらしたり、想いをはせることもできるわけです。過去を回想し、未来を予想する一、あるいは、さまざまな推測や比較、そして、そうしたものの総合。そのような心のはたらきが、第六意識であります。（多川、2013、pp.28-29）

前五識の認識は、直観的なものであり、かつ、その場限りのものにすぎません。言い換えるならば、前五識は、ただ現在の対象を直観するだけです。しかし、第六意識は、目の前にたとえ具体的な対象がなくとも、今朝楽しんだハスの花のことを思い出し、そして、さまざまに推測・比較・連想あるいは予測などをおこなって、思考を發展させることができるのです。つまり、第六意識は、現在はもちろん、過去を回想したり未来を予測して、広くあらゆる物事を認識の対象とすることができるという性質もっています。そこで、第六意識を〈広縁の識〉ともいいます。（多川、2013、p.152）

（2）薄井、グリンダーの統合モデルと前五識、第六意識

前五識、第六意識の概念とここまでの知見を、薄井、グリンダーの統合モデルに付け加えて図示する。

図表 6 薄井とグリンダーの統合モデルと前五識、第六意識



この図で、前五識と第六意識が理解しやすくなった。前五識は、その場かぎりのものであり、ただ現在の対象を直視するだけであるが、第六意識は、過去を回想し、未来を予想するなど、思考を發展させるという特徴がある。人が過去の未来のイメージを創り出し、思考を發展させることができることは人間の創造力の源泉になるとともに、逆に人を苦しめることもあるものと考えられる。

6 五感以外のものからスタートする認識（独頭の意識）

（1）独頭の意識

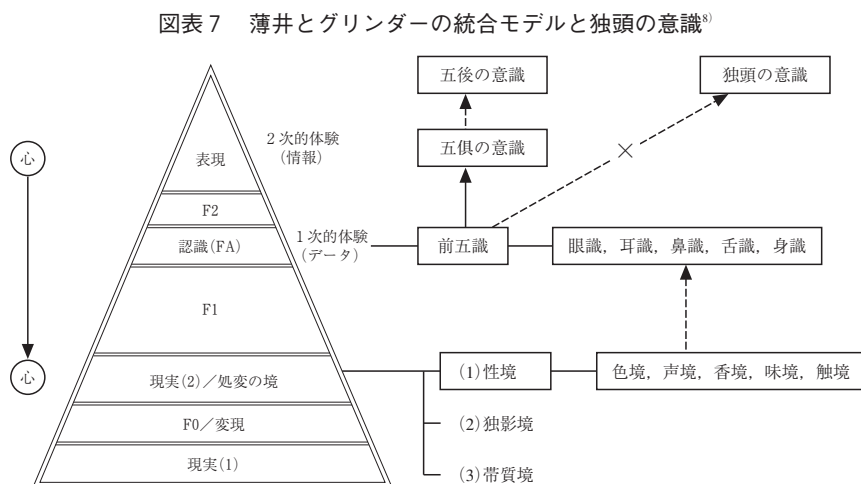
唯識論では、五感で感知するもの以外からも認識が始まることを「独頭の意識」や「五後の意識」といった概念を用いて説明している。

まず、前五識の眼識が開かれたページに印刷されてある文字をそのままに見、そして、その眼識と同時に起こった五俱の意識が、その意味をいちおう明瞭に認識します。しかし、それだけにとどまらず、それに引き続いて私たちは、そこに記述されている内容をさらに深く考えようとします。そうした思考作用が、五後意識のはたらきであるわけです。

ところで、私たちには、折にふれて思い出される文章やコトバというものがあります。思い出しては、そのコトバの意味をかみしめ、そして、より深く味わおうとします。このような意識のはたらきは、前五識といっしょでもなく、また、五後の意識のように先行する前五識の作用もありません。これが^{どくず}「独頭の意識」であります。まったく単独にその頭をもたげてくる第六意識という意味であります。（多川，2013，p. 153）

（2）薄井，グリンダーの統合モデルと独頭の意識

独頭の意識を薄井，グリンダーの統合モデルにあてはめて図示すると以下のようなになる。



「独頭の意識」とは「完全に五識と関係なく働く意識である。つまり外界とのかわりなく独自に動く」（太田，2015，p.158）ものであり、五感に基づかない第六意識というの

が存在する⁹⁾ということ唯識論では明確に説明している。第Ⅱ章で紹介した1点目の疑問に対する答えともなりうる。このように五感で感知した「現実」以外のものも認識の対象としているということを意識させることは人材開発において大きなリソースになるものと考えられる。

7 潜在意識（阿頼耶識）の影響

（1）阿頼耶識

唯識論では、五識に第六意識を加えた六識を表層の心とし、これ以外にも2つの深層の心が認識に影響すると説明する。

唯識仏教は、心の構造として眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六つの表層の心と末那識・阿頼耶識の二つの深層の心という八つの心識を考え、それによって私たちの心の実態を解明しようとした。(多川, 2013, p.32)

2つの深層の心のうち阿頼耶識について唯識論は次のように説明する。

端的にいえば、阿頼耶識とは、私たちの今までしてきたことのすべてを記憶にとどめる心的領域であります。そして、そのように心底に残存してひそかに蓄積されたわが日常のさまざまな行為・行動の気分が、おのずからにじみでてくる。それが、私たちの心のメカニズムなのだ、というのが唯識論の言い分です。

そして、そういうものが、ものごとの認識ということにおいておのずとにじみでてくるのを、初能変というのです。(多川, 2013, pp.56-58)

阿頼耶識とは、人生のありとあらゆる経験の総体であり、同時にそれは、現在の〈私〉そのものに他ならないともいえます。—この世に生をうけて以後のすべての行為・行動が、少しも漏れることなく心底に薫じられ、そして、現時点の自己にぬきがたく影響をおよぼしていることを静かに思う時、私たちは、いいようもなく深い感慨を持たしめられます。(多川, 2013, pp.63)

阿頼耶識については、図表8で薄井、グリンダーの統合モデルに加筆する。

8 潜在意識（末那識）の影響

（1）末那識

深層の心のうち阿頼耶識については、人生のありとあらゆる経験の総体と説明していたが、深層のもう1つの心である末那識について唯識論は次のように説明する。

初能変の心とは、阿頼耶識のことです。過去のあらゆる体験・経験の痕跡をかならずとどめているという阿頼耶識が、私たちが事物を認識するとき、まず、ものを言うというというのです。経験の深さというものは、やはり、ぬぎがたいものなのです。

第二能変は、末那識です。自己への激しい執着が認識対象を能変する一。

そして、それらの影響のもとで、意識・前五識が具体的な了別作用、すなわち、ものを知り分けるはたらきを起こすのだというのです。しかし、その時、たとえば気持ちを集中して見・聞きしている時とそうでない時とでは、見えるもの・聞こえるものがおのずと違ってきます。注意するということは意識などの了別境識のはたらきですから、意識が認識対象を能変しているわけです。これが第三の能変です。（多川，2013，p.33）

阿頼耶識というのは、潜在意識のことと捉えればよい¹⁰⁾ だろう。阿頼耶識のみならず、「末那識」も認識プロセスに影響を与えるとすることが唯識論の大きな特徴だと考える。ここでは、さらに気持ちを集中して見・聞きしている時とそうでない時とでは、見えるもの・聞こえるものが違ってくるという第三の能変のことまで言及されている。末那識についても、図表8で薄井、グリンダールの統合モデルに加筆する。

9 変化してやまないものを静止したスガタにおいて理解（遍計所執性）

（1）遍計所執性

私たちの心の上に映し出された影像を実体的なものとして捉え、強く執着することを、「末那識」といったが、あらゆる認識の対象を実体的なものとして捉え、それに強く執着することを「遍計所執性」という概念で説明する。

ところが、私たちは、日常生活において、自己はもちろんのこと、あらゆる認識の対象を実体的なものとして捉え、そして、それに強く執着しています。こうした心的作用は、具体的には、第六意識と第七末那識とのはたらきなのですが、諸法をこうした存在の在り方において理解することを「遍計所執性」といいます。遍計所執性とは、遍くすべてのものを実体的なものと思ひ計らい、そして、それに強く執着していくと

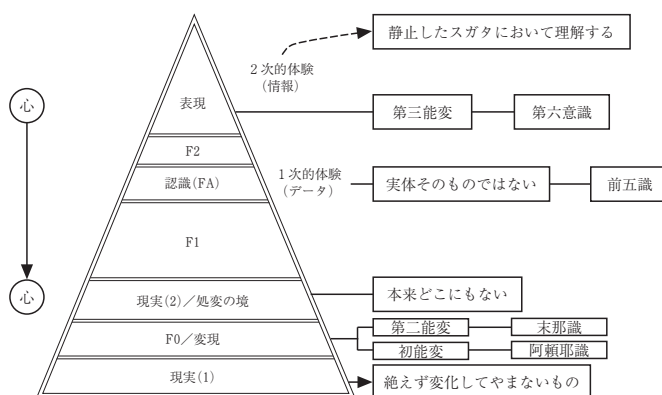
いう意味であります。

このように、私たちは、依他起性のものを、遍計所執という網をかぶせて理解しているのです。—たえず変化してやまないものを、静止したスガタにおいて理解するので、私たちが認識している内容のものは、本来、どこにもないものなのです。

（2）薄井，グリンダーの統合モデルと遍計所執性

遍計所執性の概念を薄井，グリンダーの統合モデルに入れると以下のように図示できる。

図表8 薄井とグリンダーの統合モデルと遍計所執性



本来どこにもないものを、実体的なものと捉え、それに強く執着しているという説明は、人材開発の様々な場面で有用となるだろう。また、唯識論で認識プロセスへの潜在意識の影響を説明しているところにも価値があるものと考え。第II章で提起した3点目の疑問に対する答えにもなる。

10 認識の変換プロセス（3つの能変）

（1）八識と3つの能変

ここまでレビューしてきた八識と3つの能変は次のように整理される。

いま、心の構造の八識のさまざまな名称を整理し、改めて示せば、次のようになります。

- 異熟識——（第八）阿頼耶識——初能変——深層心—本識
- 思量識——（第七）末那識——第二能変—深層心—転識
- 了別境識—（第六）意識・前五識—第三能変—表層心—転識

唯識は、私たちの心は単に心でなく「能変の心」であり、認識の対象〈境〉もまた、その能変の心によって変現した「所変の境」であることを、きわめて明確に示しています。つまり、私たちが目の前にしている認識対象も、客体そのものではなく、すでにわが心によって能変され・さまざまに色付けされたもので、それを、私たちが改めて見・聞きしている一。そして、その能変が三層になっている、それが初能変・第二能変・第三能変です。ここで、それぞれが能変である八識の特徴を大まかに示せば、次のようになります。

(初能変) 阿頼那識—過去の行為行動・体験経験の情報をすべて集積。

(第二能変) 末那識—意識下で絶えずうごめく自己執着，自己中心性。

(第三能変) 意識—ものごとに対する関心や問題意識の有無，あるいは，その濃淡。真善美への意欲，好悪の感情など。

前五識—感覚の生物学的条件，あるいは，個体的条件。

最初に認識対象を能変するのが阿頼耶識ですから，自己のいままでの行為行動・体験が，私たちがものごとを認識する場合，最初にものをいうわけです。(多川，2013，pp. 255-256)

ここでは，3つの能変が明瞭に説明されている。人が認識するものは，心の外に厳然と存在しているものではなく，3つの能変を経た，かなり独特の世界であることが理解できる。これらの知見は，第Ⅱ章で提起した2点目の疑問に対する答えになると考える。

11 認識プロセスとコミュニケーション (人人唯識)

(1) 3つの能変と人人唯識^{にんにん}

既述のように，私たちが認識している対象は客体そのものではなく，3つの能変を経て，さまざまに色付けされたものである。

第八阿頼耶識とは，言い換えれば，過去を背負って現在を生きるということですから，経験や体験の意味は重大なのです。(多川，2013，p. 256)

この第八阿頼耶識による能変(初能変)だけでなく，さらに第二能変，第三能変も行われることについて，次のように説明する。

私たちが認識する対象は，そのように長大で茫漠とした過去の行動情報群によって，

まずは能変されたものです。それが、初能変の意味です。それに加えて、末那識の自己中心性というフィルターがかかります。これらの初能変と第二能変は意識下のはたらきですので、第三能変の意識がどれも客観的たろうとし、また、平等・公平を期そうとも、この部分は修正が利きません。

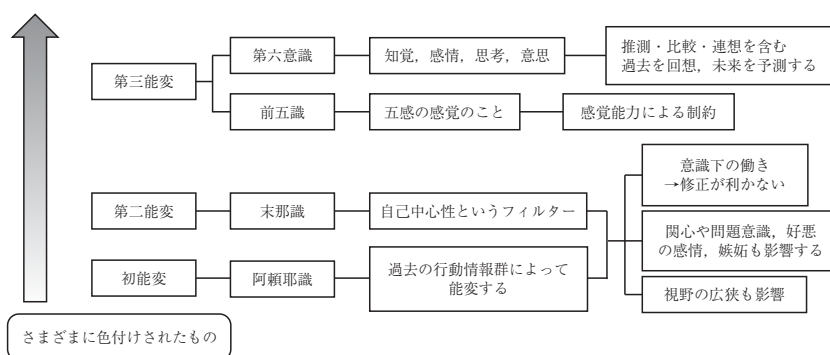
そして、その上に、目の前に展開していることがらに対する関心や問題意識が有るのと無いのでは、見え方がかなり違ってきます。そこには当然、好悪の感情もからんできますし、^{ひと}他者との比較で生ずる慢心や嫉妬の情も影を落とすでしょう。また、たとえ問題意識が有ったとしても、その濃淡によって、能変の具合は微妙に違ってきます。むろん、視野の広狭ということも影響します。（多川，2013，pp.256-257）

私たちの認識は、初能変、第二能変という潜在意識の変換を経ているので、当然、平等・公平なものとはならない。私たちは一人ひとりたがいに異なる独特の認識世界に暮らしているのだ。なお、「過去を背負って現在を生きる」という記述は、心理学の「スキーマ」の概念¹¹⁾を想起させてくれる。さらに、以下のように第三能変でさえも感覚能力の問題があり、平等・公平なものにはなりえない。

さらに、私たちの感覚能力という条件もあります。人間の視覚能力ではいわゆる可視光線だけで、それ以外の光線を肉眼でみることができませんし、音もまた、一定幅の音域を聴くことができるだけです。しかも、こうした感覚能力にはかなりの個人差があり、同じ音楽を聴いても、微妙な音の表情を聴き分ける人とそうでない人とは、同じ音楽を一緒に聞いていても、その音の世界は違うのです。

つまり、私たちは一人ひとり、たがいに異なる独特の認識世界に暮らしているわけです。そのことを、唯識仏教では「人人唯識」^{にんにん}というのですが、私たちはこの明白な

図表9 ^{にんにん} 人人認識（異なる独特の認識世界に生きている）¹²⁾



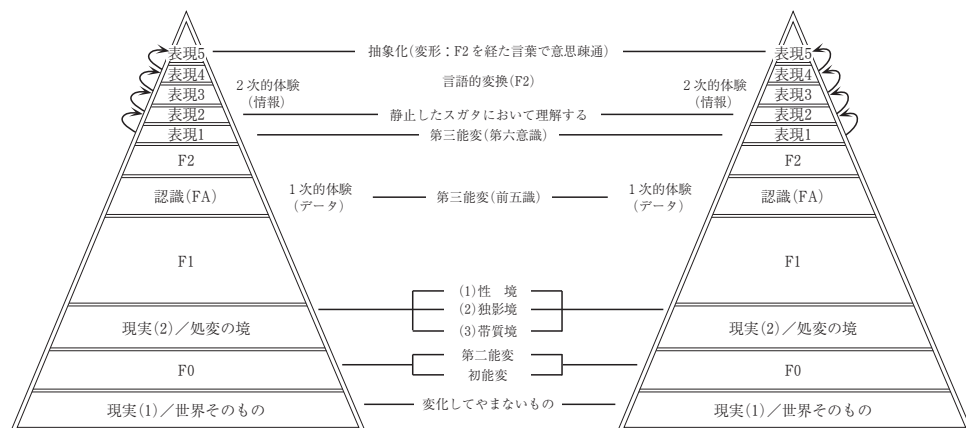
事実が、意外にわかっていません。日常の人間関係が絶えずギクシャクするのはおおむね、このためではないかと思われます。(多川, 2013, p.258)

ここまでの知見を図示したのが図表9である。こうしてみると私たちの認識は、さまざまに色付けされた1人ひとりたがいに異なる独特の世界であることが分かる。

(2) 薄井, グリンダーの統合モデルと人人唯識

私たちの認識は、過去の行動の情報群すべて(第八阿頼耶識)によって能変し、自己中心性というフィルター(第七末那識)もかかっている。これは、関心や問題意識、好悪の感情、嫉妬も影響するものの、意識下の働きであり、修正が利かない。前五識も感覚能力による制約があり、個人差が激しい。さらに、第六意識は、過去の推測、比較、連想も含み、個人差はさらに激しいものとなる。このように3つの能変を経た(さまざまに色付けされた)個人の認識が、別の個人の認識と一致することは不可能であり、2人以上の人のコミュニケーションがすれ違ったり、誤解が生じたりするのは必然と言える(図表10参照)。

図表10 薄井とグリンダーの統合モデルと人人唯識



ここまでの引用では言及されていなかったが、第六意識の段階では、コトバが介在するため、どのようなコトバを使うかといった人の癖によっても、コミュニケーションはすれ違う。さらに、人と人との実際のコミュニケーションを想起すると、何段階かの言語的変換を経た言葉(や文章)を使ってコミュニケーション(言語的コミュニケーション)を行うことが多い(図表10参照)。ただでさえ、「変化してやまないもの」を「静止したスガタにおいて理解する」(しかも、いくつもの能変を経ている)という点からも正確なコミュニケーションは不可能であるうえに、人の言葉の使い方や思考の発展の方法には癖がある。

聞いた側にも同様の癖があり、さらに正確なコミュニケーションに難しさが加わる。こうした知見が人材開発の様々な場面で大変に役立つものとする。

IV おわりに

筆者は、人材開発手法の本質的な理解に役立てるために、3本の先行研究で、学際的に認識論のレビューを行い、各理論の比較考察を行った。これらの成果をベースにして、3つの人材開発手法の体系化も試みたが、認識論のレビューに関して未だ説明しきれていない4つの事象があると第I章と第II章で指摘した。それら4つの事象に対する回答を唯識論の説明に求めたのが第III章である。

その1つ目は、「現実」以外からスタートする認識プロセスの説明不足という点についてである。これまでの筆者のレビューでは、「現実」を感覚器官で感知した後、神経学的変換（F1）を経て知覚経験をし、さらに言語的変換（F2）を行うと説明してきた。こうした説明においては、認識プロセスの出発点を五感で感知できる「現実」にしている。しかし、「現実」（ここでは五感）を感覚器官で感知すること以外からも認識がスタートすることがある。例えば、頭の中のイメージなどが起点となって認識が始まることもある。この点に関して、まず唯識論から「三類境」という考え方を紹介した。その一つ目の「性境」は、本質にもとづいて変現された影像で、正しい認識の対象と言える。しかし、これ以外に本質とはかかわりなく心がおのずからもっている作意の力によって心上に映し出された影像で、まったく根拠のない「独影境」（幻覚など）や、本質に根拠をおきながら、なお、正しく認識しえなかった「帶質境」（いわゆる錯覚や誤認の対象のこと）も認識の対象になると説明している。また、唯識論では、五感で感知するもの以外からも認識が始まることを、「独頭の意識」（完全に五識と関係なく働く意識）、「五後の意識」（先行する前五識の作用のない意識）などの概念を使って説明している。このように唯識論では、五感で感知できる「現実」以外からも認識がスタートすることを詳しく説明している。

2つ目は、F1（神経学的変換）がどのように行われるのか、そのプロセスに何が影響を与えるのかという点についてである。この点に関しては、「初能変（阿頼那識—過去の行為行動・体験経験の情報をすべて集積）」、「第二能変（末那識—意識下で絶えずうごめく自己執着、自己中心性）」、「第三能変（意識—ものごとに対する関心や問題意識の有無、あるいは、その濃淡。真善美への意欲、好悪の感情など）」、「第三能変（前五識—感覚の生物学的条件、あるいは、個体的条件）」といった変換が行われていると唯識論は説明する。この能変に関する説明こそ唯識論のユニークな点であり、それぞれの記述の括弧内は認識のプロセスに影響を与えるものを説明している。

3つ目は、認識プロセスに対する潜在意識の影響について説明が不足しているという点である。つまり、潜在意識が認識のプロセスにどのような影響を与えているかという点について理論的な説明が十分でない指摘したが、唯識論では、この点に関して、初能変（阿頼那識）と第二能変（末那識）という概念を用いて説明している。それらの影響のもとで、第六意識・前五識がものを知り分けるはたらきを起こすという。これらは意識下（潜在意識）のはたらきであり、第三能変の意識（顕在意識）がどれも客観的たろうとし、また、平等・公平を期そうとも、この部分は修正が利かないとも説明している。

4つ目は、個人の認識がコミュニケーションに与える影響について説明が不足しているという点である。これまでのレビューでは個人の認識プロセスにフォーカスをあててきたが、人の認識プロセスが2人以上のコミュニケーションや人間関係に与える影響については説明できていないと指摘した。この点に関しては、ただ1人の認識でさえも、様々な能変を経た独特の世界となっており、2人以上の正確なコミュニケーションなど不可能だということが唯識論の説明から理解できる。まして何段階かの言語的変換を経た後の2人以上のコミュニケーションが正確なものでありうるはずがない（図表10参照）。

そして本稿では、唯識論のレビューと並行して、薄井とグリンダーの統合モデルを修正したいいくつかのモデルを図示してきた。唯識論の概念を取り込みながら図を書き換え、最終的には図表10を掲載した。今回指摘した4つの事象に対する唯識論の知見も書き加えており、この図表で人の認識のプロセス、および2人以上のコミュニケーションのプロセスについても理論的な説明が可能になるものと考えている。これにより、個人に焦点をあてた人材開発のみならず、2人以上の関係性に焦点をあてた組織開発の場面でも活用できるものと考えている。それが本稿の成果と考える。とはいえ、浅学の立場で、難解といわれる唯識論を他の分野の知見に結び付けるといふ無謀な試みであり、思い違いや間違いもあるだろう。あらかじめお詫び申し上げたい。

注

- 1) 加藤（2016a）、加藤（2016b）、加藤（2018）。
- 2) 加藤（2019）。
- 3) 神経学的変換については大脳生理学の知識をあてはめて考察した（加藤，2018）。
- 4) 地橋は以下のように説明する（下線筆者）。「五感の対象は下界に物理的に存在しますが、六番目の意門の対象は思考やイメージなどの脳内現象です。物が見え、音が聞こえるのが事実であるように、妄想や連想も『法』として現実に生起した事象です。」（地橋，2006，p.80）。
- 5) 加藤（2018）。
- 6) 「唯識三年，俱舎八年」といわれ、「俱舎識の勉強を八年すれば，唯識は三年でわかる」「唯識の学をマスターするには十一年はかかるということ」。（高崎，2018，p.9）

- 7) 「心が心を見ているだけ」というときの心が「認識 (FA)」にあたるのか「表現」にあたるのかは悩んだが、「六番目の〈意識〉とは、知覚・感情・思考・意思などの心のはたらきで、常識にいうところの心と考えてまちがいない」(多川, 2013, pp.26-28) という記述から、「表現」のレベルとして記載した。図表5も同じ。
- 8) 図中、五俱の意識と五後の意識の図示について考えあぐねた。以下を参考にした。「〈五俱の意識〉は、五感(眼識, 耳識, 鼻識, 舌識, 身識)と俱に働く意識という意味の意識であるから、感覚と俱に働く第六意識のことである。」「〈五後の意識〉は、五識をきっかけにしているという点では〈五俱の意識〉と共通である。だが、そのきっかけから離れてしまって、勝手にひろがっていった意識の働きである」(太田, 2015, p.152, p.157)
- 9) 図表2の「法→意門→意識」のプロセスについて説明されていると考える。
- 10) 「初能変と第二能変は意識下のはたらきです」(多川, 2013, p.256)。「第八阿頼耶識は過去を秘匿する潜在的な自己の深層である」(太田, 2015, p.39)。「阿頼耶識は深層心理であるから、その存在を知ることはきわめて困難である」(横山, 2015, p.126)。
- 11) 「スキーマ」とは、「我々が生まれ、育ち、生きている間に学習し、その人にとって『当然のこと』として構造化された認知のことをいう。それはにわかには修正したり変更したりすることは非常に困難である」(伊藤, 2013, p.26)
- 12) 多川(2013)をもとに筆者が作図した。

参 考 文 献

- 伊藤絵美(編著)・津高京子・大泉久子・森本雅理(2013)『スキーマ療法入門—理論と事例で学ぶスキーマ療法の基礎と応用—』星和書店
- 薄井担子(1996)『改訂版 看護学原論講義』現代社
- 太田久紀(2015)『唯識の読み方〔新装版〕(オンデマンド版)』大法輪閣
- 加藤雄士(2016a)「認識論のレビューに関する一考察—人材開発の手法の理解に役立てるために—」『関西学院大学産研論集』第43号
- 加藤雄士(2016b)「認識論のレビューに関する一考察(2)—人材開発の手法の理解に役立てるために—」『ビジネス&アカウンティングレビュー』第18号
- 加藤雄士(2018)「認識論のレビューに関する一考察(3)—人材開発の手法の理解に役立てるために—」『産研論集』第45号
- 加藤雄士(2019)「認識論のモデルを活用した人材開発手法の体系化に関する一考察—サティの技法, フラクタル心理学を中心として—」『ビジネス&アカウンティングレビュー』第22号
- John Grinder & Carmen Bostic St Claire (2001), *Whispering in the Wind*, J & C Enterprises
- 高崎直道(2018)『スタディーズ 唯識』春秋社
- 多川俊映(2013)『唯識入門』春秋社
- 地橋秀雄(2006)『ブッダの瞑想法 ヴィパッサナー瞑想の理論と実践』春秋社
- 横山紘一(2005)『唯識とは何か—「法相二卷抄」を読む』増補版, 平河工業社